

Atomic Evangelists: An Investigation of the
American Atomic Narrative Through News and
Magazine Articles, Official Government
Statements, Critiques, Essays and Works of
Non/Fiction

高田, とも子

<https://doi.org/10.15017/4059961>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

(様式3)

氏 名 : 高田 とも子

論 文 名 :

Atomic Evangelists: An Investigation of the American Atomic Narrative Through News and Magazine Articles, Official Government Statements, Critiques, Essays and Works of Non-Fiction

(アトミック・エヴァンゲリスト: マスメディア・公式声明文・批評・エッセイ・ノンフィクションにみる米国の原爆言説に関する研究)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

米国の核言説空間は、被爆者の証言を重んじてきた日本の核の語りとは異なる観点からヒロシマ・ナガサキを描きだしてきた。特に、終末論的参照枠に依拠したテキストに至っては、旧ソ連との核開発競争が激化した冷戦期を中心に顕著に生み出されており、その数は膨大である。本論は、こうした「米国の核の語り」が形成されていく過程において広く流通した新聞・雑誌記事、政府による公式声明、科学者によるエッセイ、キリスト教会による声明文、論説などのテキストの分析を通し、広島・長崎への原爆投下から現代にいたるまでの米国の核の語り方の諸相を明らかにすることを目的としている。本論にて扱う様々なテキストは、これまで主に歴史研究の分野を中心に取り上げられてきたものの、実際のテキストに何が記述されていたかという点に関しては不鮮明であり、議論の余地がある。本論は、歴史学による先行研究に依拠しつつ、文学的手法によってテキストのレトリック分析を行うことで、その背後に潜む「物語」を浮き彫りにした。

第一章では、広島・長崎への原爆投下直後に2名の米国人ジャーナリストによって執筆された現地ルポルタージュを取り上げた。第一点目に、米国政府認可の特派員で、後にベトナム戦争報道の第一人者となったホーマー・ビガート (Homer Bigart) によるヒロシマ・ルポを論じた。被爆地の状況がほとんど知られていない

時期において発信された本ルポは、当事者でない語り手が出来事をいかに語りうるのか、という現代にも通底する問題を含んでいる。この問題意識を根底とし、「他者」の視点を通し、ヒロシマ・ナガサキが表象される際の語りのあり方を明らかにした。第二点目に、被爆直後の長崎市に単独入りしたシカゴ・デイリー・ニュースの記者、ジョージ・ウェラー (George Weller) の長崎ルポを分析した。ウェラーによる一連のルポは、米国政府主導の検閲により全原稿を封印されたことで知られているが、2003年に遺稿が発見され、*First into Nagasaki* という題の下で書籍として出版された。但し、「ナガサキ」と名打ってはいるものの、本書の大半は長崎原爆に関する記述ではなく、旧日本軍によって収監され、虐待を受けた連合軍捕虜達の証言によって構成されているという点は重要な論点である。本節では、捕虜証言が長崎原爆と併存して記述されるという語りの背後に、第二次大戦下における「加害と被害」を巡る米国の国民的記憶の痕跡を確認した。

第2章は、マンハッタン計画の公式スポークスマンであったニューヨーク・タイムズの科学担当記者、ウィリアム・ローレンス (William L. Laurence) の原爆報道を分析対象とした。ローレンスの語りは、原爆という未知なる存在を大衆にも分かりやすく解説したという点で重要であるが、原子力を「神なる力」とするレトリックの背後には、世界を「善と悪に分断する」という全体主義に通じる危険な二分法が潜在している様子を明らかにした。

第3章は、1946年に雑誌「ニューヨーカー」に発表されたジョン・ハーシー (John Hersey) の『ヒロシマ』がセンセーショナルな社会的反応を呼び起こし、米国核文学の「正典」とされることとなった背後にあるコンテキストの検証を行った。この検証を行うにあたり、キリスト教会による反核声明および科学者による論説を取り上げ、これら2つのテキストが、『ヒロシマ』への布石となった可能性を指摘した。

第4章は、米国の文明史家・文学批評家であるルイス・マンフォード (Lewis Mumford) による核批評を分析対象とした。マンフォードの核批評は、先行研究において、核廃絶を訴えた人道的なテキストとして位置付けられてきた。本章は本テキストの可能性を、公式声明や報道に代表されるユダヤ・キリスト教的レトリックを転覆させている点に見出し、単にモラルに回収されない点において、21世紀の核批評へも問題提起をした重要なテキストとして読み解いた。

第5章は、2015年に米国で出版されたスーザン・サザード (Susan Southard) によるノンフィクション作品『ナガサキー核戦争後の人生』を手掛かりとし、長崎原爆が言語化・物語化される際に米国の核批評空間が抱えてきた問題点を分析し、本作品を過去75年間の核言説史に修正を迫る原爆の語りであると結論付けた。

終章では、被爆証言をマスターナラティブとしてきた日本の原爆言説空間にとって、米国におけるヒロシマ・ナガサキの語られ方を視野に入れることの意義を提示した。その上で、国家・人種といった多様な領域を横断したトランスナショナルな原爆の語りこそが、21世紀の核批評にとって不可欠な視座を提供すると結論付けた。